

登山の危険

12月9日、埼玉県山岳連盟主催の山岳遭難事故防止のための講習会で、埼玉県警察山岳救助隊々長の飯田さんの山岳遭難に関わる講演をお聞きした。2012年（11月17日まで）の県内の遭難発生は44件57名、内訳は死者4名、重傷13名、軽傷9名、無事29名、行方不明2名である。救助要請は44件中37件が、携帯電話によるものだろう。

遭難原因は、道迷い、滑落、転倒、転落、発病とある。死者4名は、1名が発病、3名は転落とか。発病のために死亡された方は単独、転落死された3名のうち2名はそれぞれ単独、転落して行方不明となり後日遺体で発見されている。現在、行方不明の2名もそれぞれ単独で、単独行がリスクの大きいことが証明されている。で、あるにも関わらず、山岳雑誌が「単独行の勧め」を特集するのはどうしてなのでしょう、と飯田さんが疑問を呈していらっしやるのが可笑しかった。

転落死された残る1名の転落原因が、非常にお気の毒なものであった。家族6名でハイキングに出かけ、山頂で休憩の際、用足しのために人目につかない所に踏み込んだ結果の転落であるようだ。思いもよらない出来事だが、紛れもない「山の危険」の一事である。昨今、登山する人が非常に増えていて、山のトイレは看過できない問題になっている。

トレイルランナーの道迷いが2件報告されている。2件とも単独で短パンにランニングシャツという軽装。雨具、防寒着、ヘッドランプなし。山梨県側から雁坂峠を越えて埼玉県側を下る際、目の下に国道が見えたのでコースを外し国道めがけて下って行ったら崖となり、身動きできなくなって携帯電話で救助要請。しかし、現在地が判断できなくて自分の居場所が説明できない。遭難者の話を総合してなんとか場所を特定して救助できましたが、山を知らないシティーランナーは山に入るべきではない、と飯田さんは評していた。

山に入る人が増加しているが、人間関係を嫌って山岳会に入ることをせず、登山の知識は雑誌やネットからの情報鵜呑みなので、本当の意味での「登山の危険」が体にしみこんでいない、それが大きな問題だとぼくは思う。現代社会が情報社会ということなのでしょう。

情報社会は、情報を操る。登山という呼び方はハードっぽいので、ハイキングと呼び替える。山スキーと呼ぶとヘビーだから、バックカントリーと呼び替える。登山＝自然は非日常の世界で、非日常の世界が内包する危険に対して身構えていなければいけない、即ち危機管理意識を持っていなければ行けないのに、登山をハイキング、山スキーをバックカントリーと呼び替える結果、非日常の世界があたかも日常の世界であるかのような錯覚が生じる。危機管理のできる自立した登山者が、育ちようがない。登山の危険はここに極まります。